

一祈りと信仰のまち京都一

(1) はじめに

京都は、延暦13年(794)の平安遷都から、明治の東京奠都(新たに都につくことで都を移す遷都とは異なる)が行われるまでの間、首都機能を有していた。このため、清水寺や教王護国寺(東寺)、本願寺(西本願寺)、天龍寺などの世界遺産をはじめとして、南禅寺や知恩院など仏教の各宗派の総本山や大本山が多く、寺格が高く威厳にみち、荘厳かつ壮麗な寺観を誇ってきた。

また、古来より京都に存在する賀茂別雷神社(上賀茂神社)や賀茂御祖神社(下鴨神社)、全国の多くの稲荷神社の総本社である伏見稲荷大社など、日本を代表する神社が多く存在する。これらの神社は、「神山」や「糺の森」といった、人々の信仰の対象や社叢としての豊かな自然環境とともに、古くから人々の信仰を集めてきた。

これらの本山や古社などの聖地への参詣は、名所見物も兼ねており、「宗教の総本山」としての機能を歴史的に培ってきた京都の歴史を示す一つの側面と言える。

一方、京都では、仏の姿や功德を思い浮かべたり、仏の名を口に出して唱えたりする「念仏」が、六斎念仏や大念仏狂言などの民俗芸能として継承されている。

また、8月の盂蘭盆会にまつわる「迎え鐘・送り鐘」の風習や、信仰を確認し、より深めようと霊場に旅する「巡礼」の地が多数ある。

他にも、京都には、商売繁盛の御利益で有名な恵美須神社や神経痛・腰痛平癒の善峯寺、方除けの城南宮をはじめ、冠者殿社、大報恩寺(千本釈迦堂)などのように、古くから市民生活と密接な関係を持ち、町の人々の信仰を集めた庶民の寺社ともいえる地域の寺社がある。

(2) 祈りの場に見る歴史的風致

ここでは、民俗芸能として継承される「六斎念仏」や「大念仏狂言」、お盆の風習である「迎え鐘・送り鐘」、生業や日々の暮らしのなかに溶け込む寺社での「祈り」や「巡礼」により形成された京都の歴史的風致を示す。

(ア) 六斎念仏と大念仏狂言

口に念仏や和讃などを唱え、鉦、太鼓、瓢などを打ちながら踊躍歓喜する「六斎念仏」や、鎌倉時代末、京都で円覚十萬上人が遊戯即念仏の妙理を広めるために始めたという「念仏狂言」は民衆に信仰を広めるために作られたもので、今も「六斎念仏」や「大念仏狂言」として継承されている。

(a) 建造物

○吉祥院天満宮

南区の吉祥院天満宮は、菅原道真公の祖父清公と父是善の邸宅跡で、道真公誕生の地とも言われる。境内には、道真が参朝のときに顔を写したと伝わる「鑑の井」や道真のへその緒を埋めたと伝わる「菅公胞衣塚」など道真ゆかりの遺跡が残る。朱雀天皇の勅命で創建された最初の天満宮である。

祖父清公が遣唐使として唐へ向かう途中、海上で靈験を得たという吉祥天女を帰国後自ら刻み祀った「吉祥院」が始まりと伝わり、境内地に「吉祥天女社」が建つ。

吉祥天女社の創建は延暦23年(804)、社殿は、社伝によれば嘉永3年(1850)に再建されたと伝わり、吉祥天女、菅原清公卿、菅原是善卿、伝教大師、孔子、観世音菩薩、薬師如来を祀る。

境内地の鳥居には、万延元年(1860)の刻銘が見られる。



写真2-1-1 吉祥院天満宮

○引接寺(千本ゑんま堂)

千本ゑんま堂は、上京区千本通に面した西側にあり、平安時代初期に百人一首の一歌人「小野 篁 = 参議 篁」が創建した。平安時代中期寛仁元年(1017)に比叡山の高僧「恵心僧都 源信」の門下、定覚上

人が、創建・開山。真言宗の古刹である。

境内にある石造十重塔（重要文化財）は、至徳3年（1386）に建立。一重目に仏像、二重目に鳥居を刻んだ軸部を置き、その上に笠石を置いたもの。二重の宝塔と十三重塔の残欠の二つを組み合わせた珍しい偶数の塔で、紫式部の供養塔と伝えられている。

本堂は厨子虹梁絵様から17世紀に建立されたと考えられており、昭和40年（1965）の火災で、屋根と天井を焼失するが、残された閻魔王とその脇侍を祀る厨子が他にはない迫力を見せる。



写真2-1-2 引接寺（千本念んま堂）

○壬生寺大念仏堂（狂言舞台）〈重要文化財〉

中京区の壬生寺大念仏堂（狂言舞台）（重要文化財）は、壬生寺に古くから伝わる壬生狂言（重要無形民俗文化財）を演じる建物で、安政3年（1856）に建築された。大念仏堂は2階建てで、階上に舞台、橋掛り等を設ける。能舞台や神楽殿との共通点もあるが、飛び込みや裏通路を一つ屋根に取込み、階下を楽屋や客間とするなど、類例の稀な舞台建築である。



写真2-1-3 壬生寺大念仏堂

(b) 活動及び市街地の環境

京都の六齋念仏（重要無形民俗文化財）は、能楽系、歌舞伎系の芸能をも多く取り入れながら発達してきたもので、これらは京都を中心として生まれた地域的特色が顕著な念仏踊である。

京都の六齋念仏がいつ頃から行われたか定かでない

いが、永禄10年（1567）の『言継卿記』^{ときつぐきょうき}によれば、京都近郊の村々ではすでに六齋念仏が行われており、講集団が形成されていたとされる。

京都の年中行事や祭礼をつぶさに記述した『日本歳事史（京都の部）』（大正11年（1922）発行）には、干菜寺や壬生寺、空也堂等での六齋念仏が描かれるとともに、六齋念仏を行う区域やその活動内容が記載される。

六齋とは仏教でいう月の8、14、15、23、29、30の6日の齋日の意で、これらの日には悪鬼が出て来て人命を奪う不吉の日とされ、この日には身を慎んで、仏の功德を修し、鬼神に回向し、悪行から遠離し、善心を発起せしめるべき日とされている。この日には、念仏、和讃などを唱え、鉦、太鼓などで囃す。曲目は念仏系、能楽系、歌舞伎系の系統に分けられる。また、このほか祇園囃子、四ツ太鼓などもあり内容は多種多様である。京都の六齋念仏は干菜寺（光福寺）系の「念仏六齋」と空也堂（極楽院）系の「芸能六齋」の2系統に分類される。



図2-1-1 六齋念仏

（出典：『拾遺都名所図会』（天明7年（1787））

六齋念仏は市内13箇所で開催されており、それぞれに保存会がある。そのなかの吉祥院六齋保存会は芸能六齋を継承し、永く京都の六齋念仏の中心にあり、昭和28年（1953）には京都を代表する六齋念仏として国の助成の措置を講ずべき無形文化財に選択された（昭和58年（1983）に他の六齋念仏と合わせて重要無形民俗文化財に指定）。

明治時代の吉祥院六齋念仏は、周辺の町に一組ずつの六齋組を持ち8月25日の天満宮夏季大祭の六齋奉納には、その夕方から翌夜明まで、それぞれの組が次々と競演し、境内は立錫の余地もないほどであった。その後の時代の流れの中で各組が次々と消滅し、幾度かの消滅の危機に瀕しながらも、地元住民のたゆまざる努力によって唯一残されてきた菅原町の六齋組により、その伝統を今に伝える。

吉祥院六齋念仏は、吉祥院天満宮の4月の春季大祭と8月25日の夏季大祭に奉納される。祇園囃子や獅子舞などの演目が笛や太鼓、鉦などの演奏で披露され、境内には夜店も出て夜遅くまで賑わう。

吉祥院天満宮周辺は、京都近郊の農村地として開けた地域であり、菅原氏の所領となって天満宮が建立された。近年は工場地帯として発展し、旧集落を中心に住宅地が広がるが、この間に農地等が点在し、ツシ2階建ての農家が残る町並みを形成しており、囃子の音が集落に響く。



写真2-1-4 吉祥院六齋 (提供: 吉祥院六齋保存会)

また、千本六齋会は、京都西陣の西北部において盆に行われる六齋念仏を継承しており、最初は念仏を唱えながら、途中でさまざまな芸能を取り込んだ娯楽性豊かな芸能六齋である。8月11日から13日までの間、毎夜学区内を回り(「勸善廻り」と呼ばれる。)、門口で念仏をあげていく。8月14日夕刻からは、千本ゑんま堂において公開奉納が行われ、四ツ太鼓や獅子舞、獅子と蜘蛛などが披露される。



写真2-1-5 千本六齋会の勸善廻り (提供: 千本六齋会)

西陣地域は、高密度な市街地のなかの各所に寺社が立ち、京町家と一体となった歴史的な町並みを形成している。また、土間などを織場とした住宅である織屋建の特徴的な京町家が多く残り、歴史的な景観を形成している。千本ゑんま堂周辺は、路地に戦前からの木造住宅が立ち並ぶ密集市街地でもあり、濃密な地域コミュニティが育まれている。

表2-1-1 京都の六齋念仏保存会と主な奉納場所一覧(別表1)

番号	保存会名称	奉納場所
①	吉祥院六齋保存会	吉祥院天満宮
②	千本六齋会	引接寺(千本ゑんま堂)
③	梅津六齋保存会	梅宮大社
④	久世六齋保存会	蔵王堂光福寺
⑤	小山郷六齋保存会	上御霊神社、上善寺(鞍馬口地蔵)、千葉寺
⑥	西院六齋念仏保存会	高山寺
⑦	西方寺六齋念仏保存会	西方寺
⑧	嵯峨野六齋念仏保存会	阿弥陀寺、松尾大社
⑨	京中堂寺六齋会	伏見稻荷大社御旅所 壬生寺
⑩	壬生六齋念仏講中	壬生寺、山崎聖天
⑪	上鳥羽橋上鉦講中	浄禅寺(鳥羽地蔵)
⑫	六波羅蜜寺空也踊躍念仏保存会	六波羅蜜寺
⑬	桂六齋念仏保存会	地藏寺(桂地蔵)
—	円覚寺六齋念仏講	休会中
—	空也念仏郡保存会	休会中

一方、「大念仏狂言」は、鎌倉時代末、円覚上人が融通念仏を修し、その念仏の意味を大衆にわかりやすく説明するために仕組んだのがその始まりといわれる。

京都の「大念仏狂言」は中京区壬生寺の壬生狂言(重要無形民俗文化財)、右京区清凉寺(嵯峨釈迦堂)の嵯峨大念仏狂言(重要無形民俗文化財)、上京区引接寺(千本ゑんま堂)の千本ゑんま堂大念仏狂言(市登録無形民俗文化財)、中京区神泉苑(史跡)の神泉苑狂言(市登録無形民俗文化財)として継承される。どの「大念仏狂言」も保存会(講)の構成員により活動を行っている。

壬生狂言は、寺伝によれば、正安2年(1300)、壬生寺中興の祖、円覚上人が融通念仏を修し、その念仏の意味を大衆にわかりやすく説明するために仕組んだのがその始まりという。『日本歳事史(京都の部)』(大正11年(1922)発行)にもその起源や演目の詳細等が記載される。

上演曲目には、「炮烙割」「桶取」「棒振」「紅葉狩」など20数番を伝承している。一般の能狂言とは異なり、鐘・太鼓・笛の囃子に合わせ全ての演者が仮面をつけ、一切セリフを用いず無言で演じるなど独特の演技、演出法を持つ。

壬生狂言は、もと円覚上人と関係のある壬生郷土によって演じられていたが、今は講組織となり壬生大念仏講の講員によって行われている。また、明治36年(1903)、壬生狂言衆と地元の三条台若中とが協力して神泉苑大念仏狂言講社を結成し、神泉苑に狂言堂を新設して神泉苑狂言が始められた。



写真2-1-6 壬生狂言

壬生寺は、かつての壬生村に位置し、近隣には長屋門・式台付きの玄関・書院風の座敷構成からなる郷土住宅が今も残る。このほか、壬生地域は、大正期以降に徐々に市街化し、染物関連など中小の工場が建築された工業と住宅が共存した地域であることから、今も染織物業を営む職住共存の町家も残っており、歴史的な町並みを形成している。

毎年、4月中旬から5月上旬にかけ、市内4箇所です「大念仏狂言」が上演され、鉦と太鼓の「カンデデン」の囃子が響き、狂言見物に多くの参詣客や観光客、地域の人々が集まる。

表2-1-2 大念仏狂言の保存会及び活動場所一覧(別表2)

番号	保存会名称	奉納場所
①	壬生大念仏講	壬生寺
②	嵯峨大念仏狂言保存会	清凉寺(嵯峨釈迦堂)
③	千本ゑんま堂大念仏狂言保存会	引接寺(千本ゑんま堂)
④	神泉苑大念仏狂言講社	神泉苑

このように、六斎念仏や大念仏狂言は、地域的特色が顕著な民俗芸能であり、地域の人々を中心に脈々と受け継がれる。京都では、年中、様々な場所でこれらの民俗芸能を目にすることができ、そこでは鉦や太鼓の音が鳴り響き、踊りや演技が披露され、人々の賑わいと活気を感じさせる。

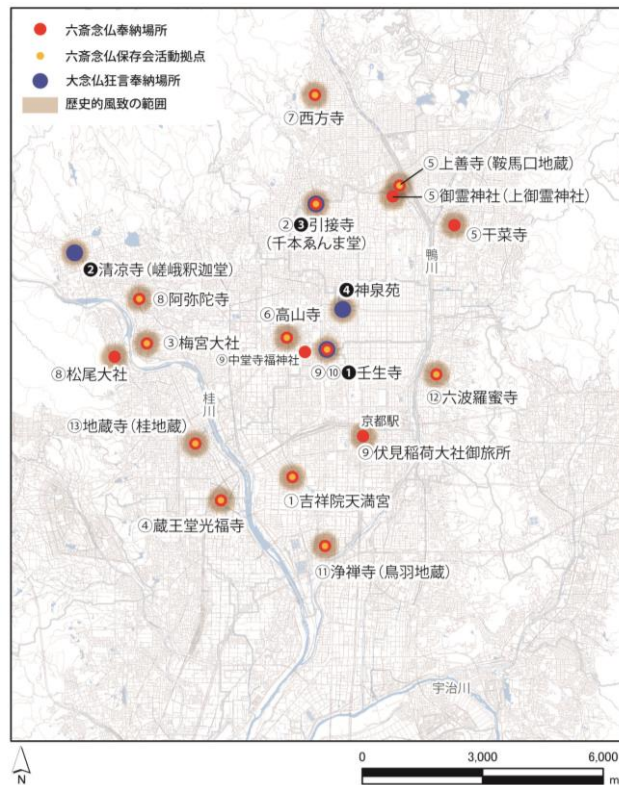


図2-1-2 六斎念仏と大念仏狂言

(イ) 迎え鐘・送り鐘

京都では、8月の13日から始まり16日の五山の送り火に終る盂蘭盆には、各家において先祖の霊を祀る報恩供養が行われる。8月7日から10日までの4日間に精霊を迎えるために六道珍皇寺に参詣して「迎え鐘」を撞く風習があり、これを「六道まいり」あるいは「お精霊さん迎え」(精霊迎え)とも言う。

この「迎え鐘」に対して、死者の霊を迷わず冥土へ送るために撞く鐘を「送り鐘」と呼び、死者が出たときやお盆に撞く風習がある。

精霊迎えを行うのは、かつての京都の葬地であった地域の寺院で、前掲の引接寺(千本ゑんま堂)でも、先祖の精霊をゑんま様の許しを得て各家庭に迎えて送る「精霊迎え」と「精霊送り」を行う。

a.六道まいり(精霊迎え)

(a) 建造物

○六道珍皇寺(六道の辻)

東山区の六道珍皇寺は、弘法大師の師にあたる慶俊僧都が平安前期の延暦年間(782~805)に開創したもので、古くは愛宕寺と呼ばれる。建立には諸説あり、平安初期に朝廷に仕えた貴族で、冥界を行き来したとの伝説が残る小野篁説もあるが、詳細は定かではない。寺伝によれば、南北朝時代の貞治3年(1364)に再興され、現在の臨済宗の建仁寺派に属する寺となった。寺の建築年代は定かではないが、山門前には、小野篁との関係をうかがわせる

「小野篁卿旧跡」〔大正2年（1913）〕と刻まれた石碑が残る。本堂には薬師三尊像（京仏師中西祥雲作）が安置されるほか、境内には閻魔堂（^{えんまどう} 篁堂）、地藏堂、鐘楼等がある。また、収蔵庫（薬師堂）には本尊薬師如来坐像（平安時代）（重要文化財（美術品））が安置されている。



写真2-1-7 六道珍皇寺本堂

(b) 活動及び市街地の環境

この周辺はかつて鳥辺野^{とりべの}と呼ばれる葬送地であり、六道珍皇寺がその鳥辺野への入口であったことより、生死の界（冥界との接点）でもあるとの考えから「六道の辻」にあたとされ、お盆には冥土から帰ってくる精霊たちは必ずここを通るものと信じられていた。

「六道まいり」の手順は、境内の山門をくぐる参道に店を出す花屋にて高野槇^{こうやまき}を購入する。次に、本堂前に移動して、水塔婆^{みずとうば}に先亡の戒名や俗名を書いてもらう。そして、迎え鐘を撞く。その後、水塔婆を線香で浄め、地藏尊宝前にて、水塔婆をその場を用意した高野槇^{みずえこう}で水回向（水を掛けながらお供えする）を行ない、その場所に納める。

古来より、精霊は槇の葉に乗って冥土より帰ってくるとされ、買い求めた高野槇には、「迎え鐘」で迎えた“おしょうらいさん”が、枝葉に乗り移り、懐かしき我が家へのしばしの里帰りとなる。

迎え鐘の起源は定かではないが、平安時代末期から鎌倉時代初期に成立した『古事談』や『今昔物語集』に鐘にまつわる説話が記載されおり、冥土に響く鐘として「迎え鐘」になったと伝わる。延宝4年（1676）に発行された『日次紀事』^{ひなみきじ}には、「東山（六道珍皇寺）地藏詣り」に関する記載があり、近世から今と同じ習俗があったことが分かる。また、『日本歳事史（京都の部）』（大正11年（1922）発行）にも六道参りのいわれや様子が記載される。

六道珍皇寺がある六原地域は、六波羅蜜寺や六道珍皇寺等の庶民仏教の寺院が立ち、東山が間近に迫

る風情ある景観を形成している。また、隣接する建仁寺のゆったりとした境内空間と六波羅から祇園につながる高密度な市街地とが巧みな均衡を作り出している。特に六道珍皇寺が面する松原通は、近世以前の五条通で、清水寺の参詣道でもあったことから、通りには茶屋や菓子舗など参詣者をもてなす店舗も残り、歴史的な町並みを形成している。



写真2-1-8 六道まいり（提供：六道珍皇寺）

b. 矢田寺の送り鐘（精霊送り）

矢田寺境内にある梵鐘は、六道珍皇寺の「迎え鐘」に対して、「送り鐘」と呼ばれ、死者の霊を迷わず冥土へ送るために撞く鐘として、死者が出たときやお盆に撞く慣わしがあり、人々から信仰されている。

(a) 建造物

○ 矢田寺

中京区の矢田寺は、奈良県（大和郡山市）にある紫陽花で有名な矢田寺の別院として、承和12年（845）満慶（満米）上人と小野篁により五条坊門付近に建立され、文和年間（1352-1356）下京区矢田町に移り、天正18年（1590）、豊臣秀吉の命により現在地へ移転したと伝わる。その後、宝永・天明・元治の大火により類焼し、現在は小堂を残すのみとなっている。小堂は昭和2年（1927）に改築されたもので、寺には改築棟上げ時の古写真が残る。



写真2-1-9 矢田寺（昭和2年（1927）頃撮影）（提供：矢田寺）

本尊の地蔵菩薩は代受苦地蔵（又は生身地蔵）とも呼ばれ、地獄で人々を救う地蔵として信仰を集める。『紙本著色矢田寺地蔵縁起』（重要文化財（美術品））に地蔵尊の縁起が描かれる。

寛文年間（1661～1673）に霊元法皇が霊験あらたかな洛中の48箇所の地蔵を巡礼して、詠歌を作り、公卿の一人が長らく法皇の代参を務めた「洛陽四十八願地蔵めぐり」の第28番札所でもある。

(b) 活動及び市街地の環境

矢田寺では、お盆の終わり8月16日に、先祖の精霊が無事に冥土に戻るよう送り鐘をついて魂を送り出す。門前では供養の塔婆の授与も行われ、境内は終日老若男女で賑わう。夜には五山の送り火を見終えた人も訪れ、送り鐘を撞く。

矢田寺の送り鐘の始まりは定かではないが、小野篁や縁起に描かれる地獄との関りから、平安期と考えられている。旧鐘には応安5年（1372）の刻銘があったと伝わるが、その後流出、戦時中の金属回収によって供出された大正期の鐘や、戦後铸造された鐘には、表面に「聖霊送鐘」と刻銘されている。また、大正期に鐘を铸造した際に作成した「聖霊送鐘銘」の扁額が小堂に残る。

矢田寺周辺は、近世には既に多様な業種の工房とその職人が居住し、今日でも問屋街や専門店街が残っており、商業・業務施設と住居が共存する職住共存の京町家が連担する町並み景観が残る。矢田寺が面する寺町通は、天正18年（1590）、豊臣秀吉の京都大改造計画により洛中の寺院が集められて形成された門前町で、現在は四条通から御池通までアーケードでつながる商店街となっている。特に矢田寺より北側は古美術商や古書店などの店舗が建ち並び、歴史的・文化的な町並みを形成しており、送り鐘の音が町中に響き渡る。



写真2-1-10 矢田寺送り鐘（提供：矢田寺）

古来より、こうした宗派を越えた京のお盆の精霊迎えのしきたりは、都人の厚き信仰のもとに千年の

時空を越えて脈々と受け継がれ、今や、京都の夏の風物詩ともなっている。

お盆の精霊迎えや送りには、これらの寺院に多くの参詣客が訪れて鐘を撞く。その鐘の音色は、先祖への思いを深く感じさせる。

表2-1-3 迎え鐘・送り鐘の活動場所一覧

番号	寺名	実施期間（活動名）
①	六道珍皇寺	8月7日～10日（迎え鐘）
②	引接寺（千本系んま堂）	8月7日～15日（迎え鐘） 8月16日（送り鐘）
③	矢田寺	8月16日（送り鐘）

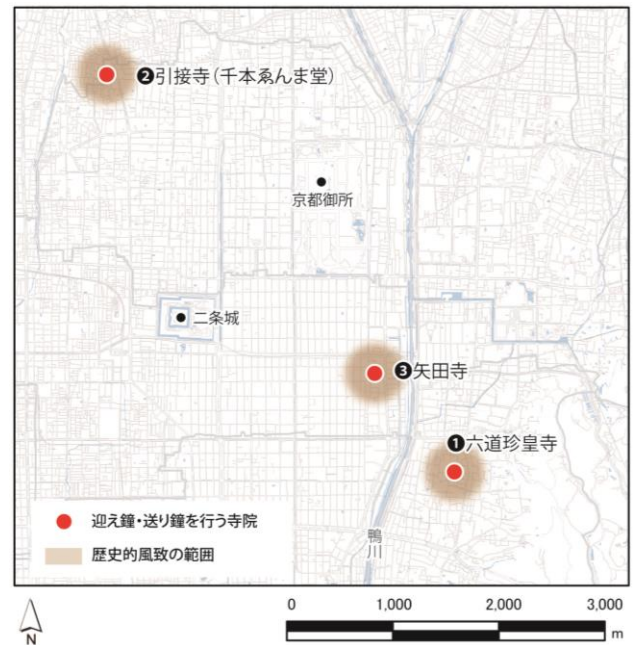


図2-1-3 迎え鐘・送り鐘

(ウ) 巡礼の地

京都には、古くから市民生活と密接な関係を持ち、町の人々の信仰を集めた庶民の寺社ともいえる地域の寺社がある。また、信仰を確認し、より深めようと霊場に旅する「巡礼」も盛んに行われる。

江戸時代の初め、戦乱が終わり天下泰平の世の中となって数十年が経過すると、人々の生活に余裕が生まれ、一般庶民の間に娯楽としての名所旧跡巡りが行われるようになった。

最も歴史のある「巡礼」として「西国三十三所観音霊場」と呼ばれる、近畿2府4県ほかに点在する観音霊場を巡るものがある。そのうち京都には番外を含めて8箇寺があり、多くの人々が訪れる。これになぞらえて、近世から盛んになった「洛陽三十三所観音巡礼」や「六地藏巡り」、「洛陽天満宮二十五社順拝」など市内には多くの巡礼地が今なお残る。

表 2-1-4 西国三十三所観音霊場（市内）一覧

番号	寺名	所在地
11	醍醐寺	伏見区醍醐伽藍町
15	今熊野観音寺	東山区泉涌寺山内町
16	清水寺	東山区清水
17	六波羅蜜寺	東山区轆轤町
18	頂法寺(六角堂)	中京区堂之前町
19	行願寺(革堂)	中京区行願寺門前町
20	善峯寺	西京区大原野小塩町
番外	元慶寺	山科区北花山河原町

a. 洛陽三十三所観音巡礼

洛陽三十三所観音巡礼は、観音菩薩を祀る京都市の三十三箇所からなる観音霊場を巡る。

(a) 建造物

○今熊野観音寺

東山区の今熊野観音寺は、東山三十六峰の今熊野山麓にある泉涌寺山内にあり、十一面観世音菩薩を本尊に祀る。創建は諸説あり、弘法大師空海上人が熊野権現の靈示を受けてこの地に庵を結んだことに始まるという。西国三十三所観音霊場の第15番札所であり、洛陽三十三所観音巡礼第19番札所である。

本堂は、寺伝によれば正徳2年（1712）に宗恕祖元律師により再建されたものであるが、詳細は定かではない。境内の石造五輪塔に慶長3年（1598）の刻銘が見られる。本堂には弘法大師の作といわれる本尊十一面観音像を祀り、参詣者は絶えることのない賑わいをみせる。



写真2-1-11 今熊野観音寺

(b) 活動及び市街地の環境

洛陽三十三所観音巡礼は、平安末期に後白河法皇が洛内の観音菩薩を祀る寺院のなかから定めたとされる。江戸時代の寛文5年（1665）には靈元天皇の勅命によって中興され庶民の間で人気を集め、『京羽二重』（貞享2年（1685））などの案内記に札所一覧が紹介されるなど、京の庶民の間で巡礼が流行した。明治維新直後の廃仏毀釈により衰退し下火になっていたが、平成17年（2005）に平成洛陽三十三所観音霊場会が結成され、再興した。

霊場は市内の歩いて回れる距離に位置し、身近に観音菩薩の御利益が得られるとして、人々に親しまれ、多くの参拝者が行き交う様子が見られる。

今熊野観音寺は、厄除開運の寺として知られ、特に頭痛・病気封じ・知恵授かりの靈験あらたかな本尊として広く信仰され、全国から参拝者が絶えない。

参拝者は巡礼地で御朱印などを頂きながら、観音菩薩の前で手を合わせ、自身の心と向かい合い、ひとときの静謐を湛える。

今熊野観音寺周辺の地域は、泉涌寺等の寺院が起伏に富む地形に立地し、東山を身近に感じることができる緑豊かな景観を形成している。また、参道周辺は古くから門前町として形成され、東大路通沿いの今熊野商店街は、新熊野神社や智積院にも近く、東側一帯は東山山麓を背景にした陶器製造元も多く残り、歴史と伝統が息づいている。

表 2-1-5 洛陽三十三所観音巡礼地一覧

番号	寺院名	場所
①	頂法寺（六角堂）	中京区六角東洞院西入
②	誓願寺	中京区新京極通三条下ル
③	護浄院（清荒神）	上京区荒神口通寺町東入
④	行願寺（革堂）	中京区寺町通竹屋町上ル
⑤	新長谷寺（真如堂）	左京区浄土寺真如町
⑥	金戒光明寺	左京区黒谷町
⑦	長楽寺	東山区円山町
⑧	大蓮寺	左京区東山二条西入
⑨	青龍寺	東山区下河原通八坂鳥居前下ル
⑩	清水寺善光寺堂	東山区清水
⑪	清水寺奥の院	東山区清水
⑫	清水寺本堂	東山区清水
⑬	清水寺朝倉堂	東山区清水
⑭	清水寺泰産寺	東山区清水
⑮	六波羅蜜寺	東山区四条通大和大路東入
⑯	仲源寺（目疾地藏）	東山区四条通大和大路東入
⑰	蓮華王院（三十三間堂）	東山区三十三間堂廻り町
⑱	善能寺	東山区泉涌寺山内町
⑲	今熊野観音寺	東山区泉涌寺山内町
⑳	泉涌寺	東山区泉涌寺山内町
㉑	法性寺	東山区本町16丁目
㉒	城興寺（成興寺）	南区東九条烏丸町
㉓	教王護國寺（東寺）	南区九条町
㉔	長圓寺	下京区松原通大宮西入
㉕	法音院	東山区泉涌寺山内町
㉖	正運寺	中京区蛸薬師通大宮西入
㉗	平等寺（因幡堂）	下京区烏丸松原上ル東入
㉘	壬生寺中院	中京区壬生柳ノ宮町
㉙	福勝寺（瓢箪寺）	上京区出水通千本西入
㉚	地藏院（椿寺）	北区大将軍川端町
㉛	東向観音寺	上京区今小路通御前通西入
㉜	廬山寺	上京区寺町通広小路上ル
㉝	清和院	上京区七本松通一条上ル

b. 洛陽天満宮二十五社順拜

洛陽天満宮二十五社順拜とは、京都に所在する天満宮のなかから、特に菅原道真にゆかりの深い25社を順拜する風習である。

日本全国に菅原道真を祭神とする神社は北野天満宮と太宰府天満宮のほかにも全国に多数あり、これらは天満宮、あるいは天満神社、天神社などと呼ばれる。

死後怨霊になったとされる菅原道真は、農耕や学問の神として多くの人々の崇敬を受けた。紙本著色北野天神縁起(国宝、(弘安本/重要文化財(美術品)))には、菅原道真一代記や北野天満宮社草創が描かれる。

(a) 建造物

菅大臣神社

下京区菅大臣町の菅大臣神社は、菅原道真公(845～903)の邸及び菅家廊下と称する学問所があったところであり、道真公の誕生の地とも伝わる(諸説あり)。『近世社寺建築緊急調査報告書』(京都府文化財保護課)によれば、本殿は、天保6年(1835)造替の下鴨神社旧殿を明治2年(1896)に移築したもので、木造銅板葺三間社流造である。

道真公が大宰府(古代地方行政機関としての名称。現在の「太宰府」)左遷に当り「東風吹かば匂ひをこせよ梅の花 主なしとて春な忘れそ」と詠んだ「飛梅の地」と伝わり、拝殿前の鳥居の傍の紅梅が満開になると、春の訪れを告げる。

菅大臣神社は、かつてはこの街区一町が社域であったようだが、現在は参道にのみ面する長屋が立ち並ぶなど、中心市街地ならではの敷地構成となっている。この地域は、商業と住居が共存する職住共存的京町家が今も残り、寺社とともに歴史的な町並みを形成している。



写真2-1-12 菅大臣神社

水火天満宮

上京区の水火天満宮は、創建は延喜3年(903)、

醍醐天皇の勅令により菅原道真公を祀ったことが天神信仰の端緒となった天満宮で、昭和25年(1950)の堀川通拡幅に伴い、現在地に移転する。

本殿は、天明8年(1788)の大火により焼失したが、文化8年(1812)に再建(高欄擬宝珠刻印)、木造銅板葺一間社流造である。

水火天満宮周辺は、日蓮宗本山の本法寺や茶道文化と関連の深い小川通にも近く、織屋、商家と寺社や茶道家の門構えが風雅な地域固有の町並みを形成している。



写真2-1-13 水火天満宮

(b) 活動及び市街地の環境

「洛陽天満宮二十五社順拜」とは、京都に所在する天満宮のなかから、特に菅原道真にゆかりの深い25社を順拜する風習で、25社、12社、御霊地3社が記されており、25社巡拜が難しければ12社を巡拜し、それも難しければ御霊地3社を巡拜すれば相応の御利益があるとされていた。御霊地3社は第1番の菅大臣神社(菅大臣天満宮)、第9番の北野天満宮、第10番の水火天満宮となっている。

起源は、北野天満宮所蔵『日記』(文政6年(1823))に記載された「洛陽二十五社順拜」と考えられているが、他にも『都すゞめ案内者』(宝永5年(1708)ころ)に記載された「天神順参二十五ヶ所」や北野天満宮所蔵『記録』(元禄12年(1699年))の『洛陽七天神詣之次第』に列記された天満宮を巡る「洛陽七天神」などがあり、天神信仰が今も受け継がれている。

参拝者は、病氣平癒を願って牛臥像を撫でたり、拝殿前で手を合わせて合格を祈願する。2月25日の道真公の命日には、道真公が好んだ梅を愛でながら、春の訪れを感じる。

表 2-1-6 洛陽天満宮二十五社

番号	神社名	住所	備考
①	菅大臣神社	下京区	十二社, 御霊地三社
②	北菅大臣神社	下京区	
③	筑紫天満宮	下京区	十二社
④	一夜天満宮	中京区	壬生寺内
⑤	洛中天満宮		現存せず
⑥	火除天満宮	下京区	
⑦	菅原院天満宮	上京区	十二社
⑧	安楽寺天満宮	上京区	十二社
⑨	北野天満宮	上京区	十二社, 御霊地三社
⑩	水火天満宮	上京区	十二社, 御霊地三社
⑪	上御霊天満宮	上京区	
⑫	梶井天満宮		十二社, 現存せず
⑬	下御霊天満宮社	中京区	十二社, 下御霊神社内
⑭	雪天神社	東山区	
⑮	松風天満宮	東山区	十二社知恩院内
⑯	小松天満宮	東山区	
⑰	安井天満宮	東山区	
⑱	高台寺天満宮	東山区	高台寺内
⑲	阿波天満宮	東山区	
⑳	紅梅天満宮	下京区	十二社, 万年寺内
㉑	文子天満宮	下京区	
㉒	千喜万悦天満宮	下京区	西念寺内
㉓	法然寺天神	下京区	移転前の法然寺内
㉔	大雲院天満宮	下京区	十二社, 大雲院内
㉕	錦天満宮	中京区	十二社

c.六地藏巡り

京都では、毎年8月22日、23日の両日に、洛外6寺の地藏尊を巡り、家内安全、無病息災を祈願する「六地藏巡り」が行われる。

(a) 建造物

○山科地藏堂（徳林庵）（市指定有形文化財）

山科区四ノ宮は京都から山科を経て東国へ向かう東海道上の一集落で、古来交通の要衝として栄えたところである。山科地藏（四ノ宮地藏ともいう）が安置される山科地藏堂（市指定有形文化財）は、徳林庵の境外仏堂として旧道に面して建っており、宝形造の六角堂である。本堂は明治41年（1908）に築造されたもので、本堂前の茶所に飛脚が寄進した文化10年（1813）の銘のある竈が残る。



写真2-1-14 山科地藏堂（徳林庵）と六地藏巡り

(b) 活動及び市街地の環境

「六地藏巡り」の起源は諸説あるが、『山城州宇治郡六地藏菩薩縁起』（寛文5年（1665））によれば、小野^{おの}^{たかむら}が地獄で出会った地藏尊の像六体を造立し、伏見六地藏の大善寺に安置したが、その後保元2年（1157）、一体だけを大善寺に残し、他の五体を山科四ノ宮河原、上鳥羽、御菩薩池（現在は鞍馬口の上善寺）、桂の里、常盤院の5箇所^{はた}に各一体ずつ移し、「巡り地藏」として供養したという。『日本歳事史（京都の部）』（大正11年（1922）発行）にも六地藏のいわれや六地藏を巡拝することが記載されている。

昭和期には、現在の札（お幡）が生まれ、参詣者は各寺の札を玄関に吊るし、1年間の疫病退散、家内安全、福德招来の護符にする。初盆には水塔婆供養し、3年間巡拝すると六道の苦を免れるとされた。巡拝に順序はなく、巡拝者は各寺院を参拝し、受付の僧らに塔婆を書いてもらい、それを線香の煙で清めて参拝し、櫛^{しきみ}の枝で水回向^{みずえこう}をする。その後、赤、青、黄、緑、紫、白のお幡を授かり家に持ち帰る。

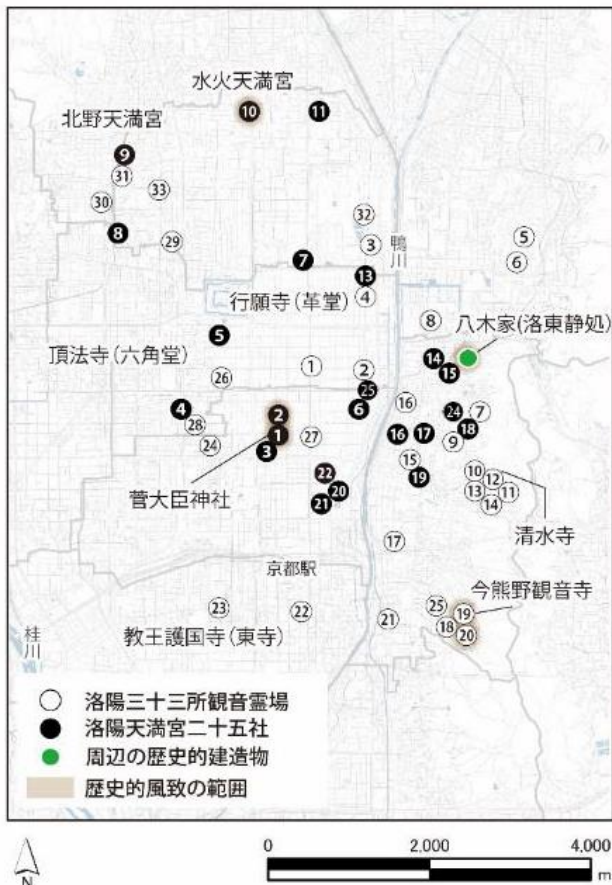


図2-1-4 京都市内の主な巡礼地

表2-1-7 六地藏巡り寺院一覧(別表3)

地藏名	寺院名	街道名	地域名(行政区)	幡色
伏見六地藏	大善寺	奈良街道	六地藏(伏見)	白
鳥羽地藏	浄禅寺	西国街道	上鳥羽(南)	黄
桂地藏	地藏寺	山陰街道	桂の里(西京)	緑
常盤地藏	源光寺	周山街道	常盤院(右京)	紫
鞍馬口地藏	上善寺	若狭街道	鞍馬口(上京)	赤
山科地藏	山科地藏堂 (徳林庵)	東海道	四ノ宮(山科)	青

山科地藏堂は、旧東海道に面して建っており、街道沿いは毘沙門堂や諸羽神社への参道入口もあり、町家や農家住宅なども見られ、歴史的な町並みを形成している。「六地藏めぐり」の両日、山科地藏堂周辺では四ノ宮祭が開催され、旧東海道沿いに縁日が立ち、沿道一体が賑わう。

これ以外の地藏を祀る寺院も、旧街道の入口付近に建ち、六地藏巡りの日は参拝者で境内周辺が賑わい、参詣者が返納した前年のお幡が境内地に吊るされ、風にたなびく。



写真2-1-15 六地藏巡りの札(お幡)



図2-1-5 六地藏巡り

(I) まとめ

このように、京都では古くから念仏という信仰活動が民俗芸能や風習として地域の人々に継承されている。また、京都の歴史ある寺社には、古くから語り継がれてきた様々な言い伝えを持ち、それが現在も信仰心として受け継がれているところが数多く残っている。これらの寺社は、周辺の村落や門前町、街道沿いの家並みなどとともに歴史的な町並みを形成している。

庶民の信仰の場である寺社とその周辺の歴史的な町並みが残る市街地において、六斎念仏や大念仏狂言の鉦や太鼓の音、お盆の精霊を迎え送る鐘の音、庶民の信仰を集めた寺社の読経の声や木魚の音、近所の人々が通りがかりにお参りする祠の鈴や拍手の音などが、祈りと信仰が京都の人々にとって日々の生活に根付いた活動であることを感じさせる。

(3) 本山と聖地に見る歴史的風致

京都市内には、平安遷都より形成されてきた名所や旧跡が数多くあり、また四季折々の自然を楽しむことができる多くの景勝地があったこともあり、「都名所図会」等の名所図会本が多数出版された。多くの人々は京都への旅に駆り立てられ、本山まいりや参詣は、名所見物という娯楽を兼ねた信仰の旅として定着していた。これにより、東西本願寺をはじめ諸本山の近辺や、街道筋の誓願寺周辺、清水寺に連なる寺院付近には、旅人のための宿が建ち並ぶようになった。

ここでは、京都が持つ「宗教の総本山」としての位置付けにより形成された京都の歴史的風致を示す。

(7) 愛宕信仰と愛宕詣で

愛宕山は、火伏せの神を祭る神山として畏敬され、この地を代表する山として古くから月詣りの場所として人々に親しまれてきた。

愛宕信仰は、愛宕山に鎮座する愛宕神社の愛宕神に対する信仰で、元来防火神として崇められ、現在も同社の「火廻要慎^{ひのようじん}」の護符を籠の上に祀る風俗があるが、室町後期には愛宕大権現と称し、軍神ともなった。

(a) 建造物

○愛宕神社

右京区の愛宕神社は大宝年間（701～704）に役小角が神廟を造立したことに遡るとされる、全国の愛宕神社の総本社である。近世までは神仏習合の形態をとり、白雲寺・愛宕権現と呼ばれた。修験者の修行場であるとともに、火伏の神としても信仰を集めた。現在の祭神は本社に稚産日命・埴山姫命・伊弉冉命^{いざなみ}など、合わせて十数柱が祀られている。本社本殿は棟札より天保7年（1836）に再建されたことがわかる。昭和4年（1929）に曳家・改修され、同時に幣殿及び会所が築造された。



写真2-1-16 愛宕神社

○平野屋

愛宕神社の一の鳥居の麓に茶店を構える平野屋は、創業約400年の老舗で、店舗は19世紀前半に建築された（『嵯峨鳥居本まちなみ調査報告書』（昭和51年京都市））。保津峡谷に近い立地から、鮎問屋を営んでおり、保津川水系の清流で獲れた新鮮な鮎を、一晩休ませ朝一番で「鮎もちさん」と呼ばれる担ぎ手が両天秤で京の料亭に卸していた。やがて愛宕神社の参詣客にも鮎料理を提供するようになった。

愛宕名物「志んこ」は、米の粉で手造りしただんごで、ニッキ・お茶・白の三色で愛宕山の九十九折の坂道を表す。



写真2-1-17 平野屋

○嵯峨鳥居本町並み保存館

右京区の「嵯峨鳥居本伝統的建造物群保存地区」内に建つ京都市嵯峨鳥居本町並み保存館は、明治時代の初めにこの地に建築された民家（『嵯峨鳥居本まちなみ調査報告書』（昭和51年京都市））を、京都市が復元整備し、地域が維持管理を行い、一般公開している。木造ツシ2階建てで、出格子やばったり床几、駒寄せを構え、2階は虫籠窓、屋根には煙出しを載せる。



写真2-1-18 京都市嵯峨鳥居本町並み保存館

(b) 活動及び市街地の環境

京都の市中には各所に愛宕灯籠があつて、遥か西北の愛宕山権現を崇拝するとともに、家々の台所には必ず「火廻要慎」の愛宕の祈禱札^{きとう}が貼られていた。

「伊勢には七度，熊野へ三度，愛宕山さんへは月詣り」とも言われ，山頂の愛宕神社に火伏せを願って京都だけでなく全国から参詣者が訪れる。



写真2-1-19 千日詣

こうした「愛宕詣」のなかでも，ことに7月31日夜から8月1日午前明け方にかけて行われる通夜祭には，参詣者が多く，一の鳥居のある嵯峨の鳥居本から，山頂まで，人の列が続く。この日のお参りは千日詣と呼ばれ，延宝4年（1676）に成立した『日次紀事』のなかでも記されている。一日で千日の参詣に匹敵すると言われており，参詣者は火災除けの護符と櫛しきみの枝をうけ，これを家に持ち帰って神棚やおくどさんに祀る。



写真2-1-20 火除け札

愛宕街道は清凉寺（嵯峨积迦堂）の門前から西へ鳥居本を経て清滝・愛宕山へ通じる道であり，愛宕神社への参詣路である。江戸時代の書物には，京都から御室・清凉寺・清滝の順路で愛宕への道が描かれており，愛宕山への参詣道として，古くから多くの人々に利用されてきたことが分かる。

街道沿いに位置する嵯峨鳥居本は，重要伝統的建造物群保存地区になっており，室町末期ごろ，農林業を主体とした集落として開かれた。その後，江戸時代中期になると，愛宕詣の門前町としての性格も加わり，江戸時代末期から明治・大正にかけて，愛宕街道沿いには，農家，町家のほかに平野屋などの茶店も建ち並ぶようになった。

地区の中ほどにある化野念仏寺を境として上地区と下地区に分けると，愛宕神社の一の鳥居に近い上地区は主として茅葺の農家風，下地区は町家風の建物が周囲の美しい自然を背景に建ち並び，すぐれた歴史的環境を形成している。その中に京都市嵯峨鳥居本町並み保存館も建っており，参詣者が足を休める。

愛宕神社と愛宕街道においては，通夜祭をはじめとする愛宕詣での営みや，街道沿いにおいて行われる様々な祭礼が，寺社等の歴史的建造物や街道沿いの町並み，また信仰の山の風景と一体となって，厳かでありながらも人々の信仰とともに親しまれてきた参詣道としての街道の風情を，今もなお感じることができる。

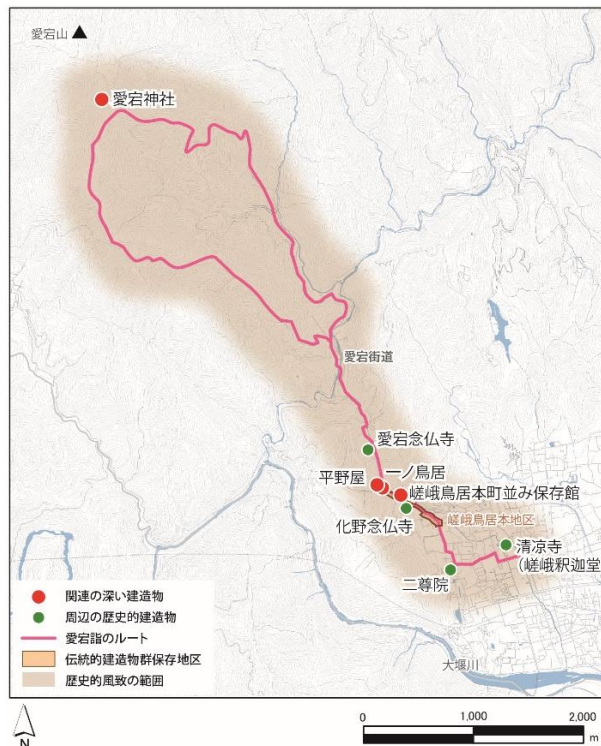


図2-1-6 愛宕神社と嵯峨鳥居本

(イ) 本願寺への本山まいりと本願寺^{かいわい}界隈のもてなし

下京区の東西本願寺への「本山まいり」は、江戸時代から行われており、現在でも両本願寺は「本山まいり」の盛んな寺院として有名である。

天正19年(1591)、豊臣秀吉の命により京都六条堀川へ本願寺(現在の西本願寺)が移転し、周辺には、坊官や商工業者が移住、寺内町(西寺内)の町並みが形成されていった。なお、本願寺の歴史は、弘長2年(1262)に没した親鸞の遺骨を改葬し廟堂を建立したことから始まる。その後、豊臣秀吉に保護され、現在の地に移転するまで、いくつかの地を巡った。

慶長7年(1602)、徳川家康により烏丸七条の地を与えられ、翌年東本願寺が建立され、本願寺(西本願寺)、真宗本廟(東本願寺)に分派することになった。

(a) 建造物

○本願寺(西本願寺) 阿弥陀堂<国宝>

西本願寺阿弥陀堂(国宝)は、宝暦10年(1760)の建築で、真宗寺院の阿弥陀堂及び本堂としては我が国最大級の規模である。畳敷の広い外陣や金箔や彫刻、彩色等で荘厳された内陣など、御影堂と良く似た姿を持つが、左右対称の平面、柱位置の調整や架構の工夫、禅宗様をふんだんに摂取した造形など、より発展した技法を具備する。



写真2-1-21 西本願寺阿弥陀堂

○真宗本廟(東本願寺) 御影堂<重要文化財>

東本願寺御影堂(重要文化財)は、明治28年(1895)の建築で、単層、入母屋造、本瓦葺、組物は側柱上が四手先、入側柱上は三手先とし、平面は真宗本廟の典型を持つ。

現在の伽藍は元治元年(1864)の焼失後、幕末から昭和にかけて順次再興された。御影堂は20世紀中葉以来の規模と形式を継承しており、我が国最大の平面規模をもつ雄大な伝統木造建築である。



写真2-1-22 東本願寺御影堂

○八木仏具店

東本願寺門前の八木仏具店は、寛政2年(1790)創業の念珠や打敷^{うちしき}等を扱う仏具店で、『都の魁』(明治16年(1898))にも記載される。店舗の建築年代は不詳だが、明治期と伝わる。昭和3年(1928)に店舗の一部を改築した際の建築認可證の写しが残る。



写真2-1-23 八木仏具店

○となみ詰所

東本願寺門前の不明門通に面するとなみ詰所は、富山県砺波地方の門徒衆が開所した詰所であり、現在は民宿として利用される。当初は涉成園東部に位置していたが、その後移転。昭和20年(1945)、本願寺と京都駅の間防火帯をつくるための建物疎開により土手町に移転、さらに昭和25年(1950)に現在の場所に移転した。登記簿等によれば、建物は大正4年(1915)に建築された町家を改装したものである。



写真2-1-24 となみ詰所

(b) 活動及び市街地の環境

報恩講ほうおんこう（御正忌報恩講ごしょうき）は、浄土真宗の宗祖親鸞の年忌法要で、33回忌にあたる永仁2年（1294）に、本願寺三世覚如が『報恩講私記』を撰述したことを起源とし、それより現在に至るまでもっとも重要な法要として、東西本願寺及び末寺、門徒宅で厳修されている。東本願寺（真宗大谷派本山）では11月21日～28日、西本願寺（浄土真宗本願寺派本山）では1月9日～16日の間に行われ、東西本願寺やその界限では、溢れんばかりの参拝者を迎える。



写真2-1-25 報恩講時の本願寺の様子

東本願寺寺内町（東寺内）は、寛永18年（1641）の幕府の寄進によって形成され、西本願寺寺内町（西寺内）とともに寺内町として発展していった。

この界限には、諸国から参詣する多くの信者のために、古くから多数の宿が設けられており、現在でも旅館が多数集まった町並みの姿を見せる。江戸時代、東本願寺の4度の焼失により、その再建の都度、全国から多くの門徒や職人が奉仕上山し、作事にあたった。延べ1千万人の従事者が出身地別に泊まる場所として、各国元の門徒衆によって詰所（御小屋・御講屋）が設けられた。明治中期には東本願寺周辺に46軒の詰所があり、明治10年（1877）の鉄道開通・京都駅開業以降は、多くの参詣者が鉄道を利用して訪れるようになった。現在もとなみ詰所を含む5軒の詰所が宿として営みを続ける。

また、本願寺の寺内町である特徴として、仏具（仏壇じゆず、数珠ひょうく、表具ほうえ）や法衣を扱う商店も多数集まる。京仏具は京都の伝統産業の一つであるが、同地区はその中心となっている。通りに並ぶ仏具店の店頭には、きらびやかな仏具や念珠等が並べられ、お香の香りが界限に漂っており、寺内町の雰囲気をもより一層醸し出す。仏具店や旅館は同じ業種が集中することによって、寺院を中心とした独特の町並み景観を形成している。八木仏具店は東本願寺前に店舗を構え、長年の伝統を守りながら念珠等の仏具を扱い続

け、参拝者を出迎える。



写真2-1-26 本願寺門前の町並み

他にも、本願寺に油を卸していた西川油店の店舗や仕舞屋造の家々、本願寺派寺院明覚寺など中小寺院の表構え、大寺院のいらか 薨などにより形成された町並みは地区に固有のもので、そのなかで僧侶や人々は日々の生活を行っている。これらの地域は「本願寺界わい景観整備地区」に指定されており、この界限特有の歴史的な町並みを形成する。

これらの寺内町の営みによって醸し出される風情のなかで、本山まいりに訪れる信者たちは、仏具店等の歴史的な町並みを行き交いながら、本願寺の雄大な建造物への参拝を通じて、信仰を深めていく。

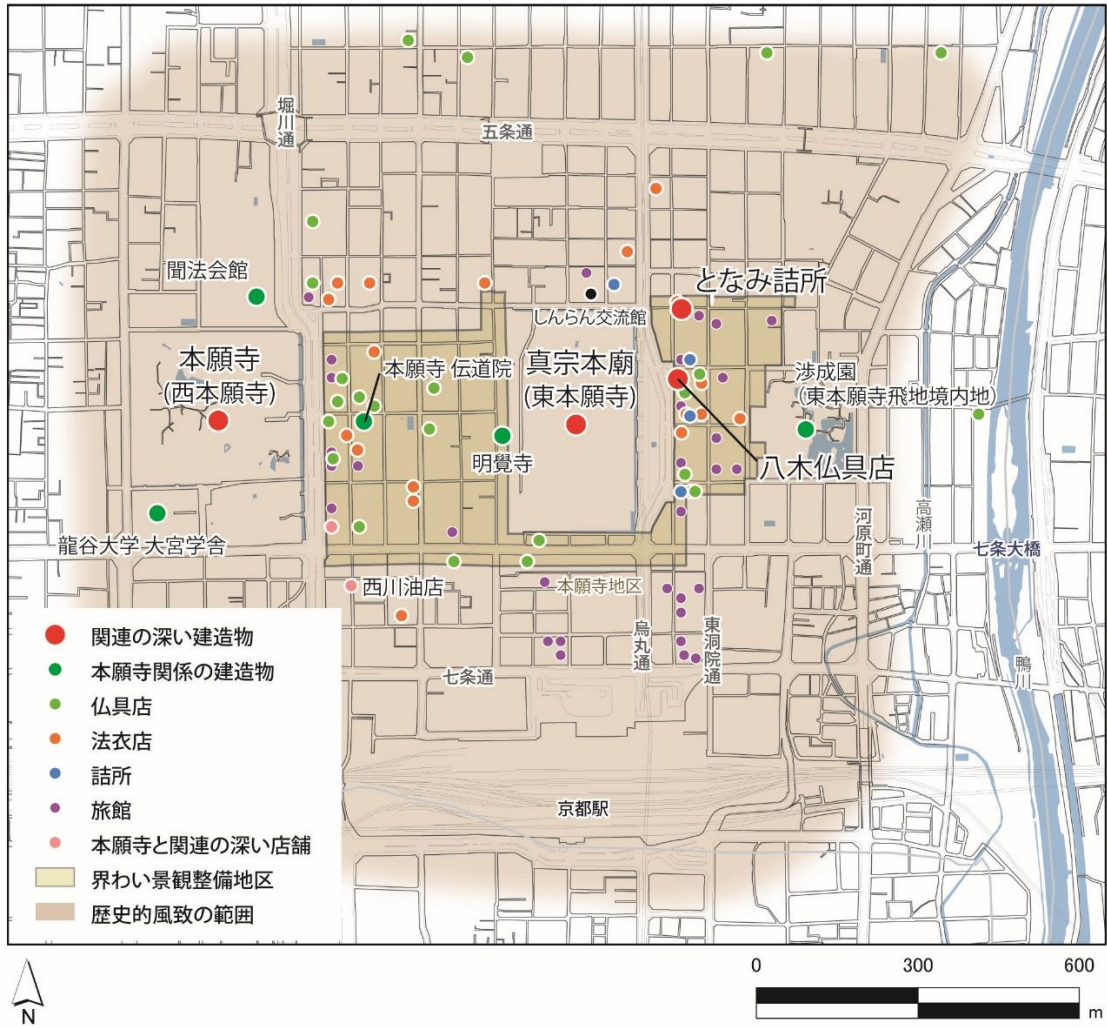


図2-1-7 本願寺界隈 (参考：京都府仏具協同組合HP, 住宅地図より抽出)

(7) 八坂神社から清水寺への参詣者へのもてなし

東山山麓の八坂神社や法観寺、清水寺は、古くから信仰の地として、そして都を代表する風光明媚な名所として、数多くの参詣客や見物人を集めてきた。今も国内外からたくさんの老若男女が訪れる京都第一の名所である。

(a) 建造物

○法観寺八坂塔<重要文化財>

八坂の塔で知られる法観寺は、平安京以前の創建と伝えられる寺院で、寺伝では、聖徳太子が五重塔を建て仏舎利を納めて法観寺と号したという。創建には渡来系豪族の八坂造やさかのみやつこが関わったという。

八坂塔（重要文化財）は、永享12年（1440）に建築され、純然たる和様建築で、白鳳時代の建築様式を今に伝えるものである。

町家の屋根越しから見え隠れする八坂の塔の力強い姿は、この地域のシンボルとして重要な歴史的風致の構成要素となっている。



写真2-1-27 八坂塔

○清水寺本堂<国宝>

懸崖造けんがいづくりの本堂（国宝）で有名な清水寺は、清水寺の創建と本尊千手観音にかかわる縁起がまとめられた『清水寺縁起絵巻』（永正17年（1520）頃）によると、鹿狩りにきた坂上田村麻呂が、この地で修行中の延鎮に殺生を戒められ、延暦17年（798）二人で千手観音の像をつくり、一堂を創建したのが始まりとされる。幾度もの焼失と再建を繰り返したため、室町後期に遡る仁王門が最古の遺構である。現在の伽藍がらんは、寛永10年（1633）に徳川家光の援助により再建された本堂、三重塔などが中心となっている。



写真2-1-28 清水寺

○七味家本舗

「産寧坂伝統的建造物群保存地区」は、門前町で、一階を店とする虫籠窓の町家、茶店が並ぶ。地区内に建つ七味家本舗は、明暦年間（1655～1659）の創業で、店舗の建築年は定かではないが、大正時代の写真に現在と同じ建物が写る。



写真2-1-29 七味家本舗

(b) 活動及び市街地の環境

清水寺の表参道は、昔から清水坂とされており、都からの参詣者は、五条通（現松原通）から五条橋を渡り、清水坂を上った。近世になると、八坂神社から産寧坂に至る参詣道が、東山めぐりの主要な道の一つとなり、道の賑わいは、京都市中と郊外の諸名所を屏風画面に描き出す『洛中洛外図』（桃山時代）や清水寺や八坂塔を描く『東山遊楽図』（江戸時代）にも取り上げられた。その後二年坂が登場し、現在の参詣道へとつながっていった。これらの参詣道には茶屋などが多く建ち並び、天保14年（1843）の記録『諸商売人別御改書』には、清水門前町において茶碗商売や茶店、人形屋などがあったことが示されており、この頃既に参詣客目当ての土産屋などが形成されていた様子が分かる。

産寧坂から八坂神社に至る参詣道は、「産寧坂伝統的建造物群保存地区」に選定されており、現在でも、江戸時代から続く伝統的な建造物の店先で、京人形や清水焼等の伝統工芸品を販売する土産物の店舗が

営まれ、中には、今なお店の奥で伝統工芸品を生産しているところもある。産寧坂の階段を登りきったところに建つ七味家本舗は、創業当時は茶店を生業として清水参詣客をもてなしてきた。「からし湯」が評判を呼び、七味唐がらしを商うようになり、今も昔とかわらず七味唐がらしを求める参詣客で賑わう。

このように、一帯は寺社をはじめとしたいくつもの名所があり、それをつなぐように参詣道が形成されている。そこには、土産物の店舗の店先に工芸品が並べられている風景があり、歴史的な町並みに彩りをもたらし、参詣道を行き交う参詣客に、古都の風情と心の安らぎを感じさせている。



写真2-1-30 産寧坂の町並み

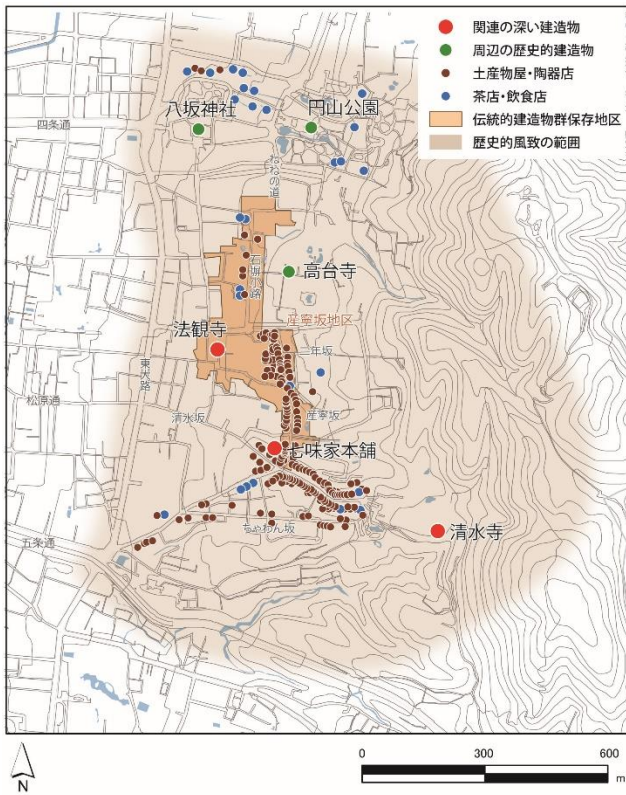


図2-1-8 八坂神社から清水寺界限 (参考：住宅地図より抽出)

(I) まとめ

京都において行われてきた「本山まいり」や「参詣」は、今なお人々の心のよりどころと安らぎを求める活動として残り、その核となる寺社や名所とその周囲に形成されてきた門前町の町並みとそこで行われる人々の活動がそれぞれ固有の世界を形成している。

そして、それぞれの地域は参詣や修行のため京都を訪れる人々へのもてなしをはじめ、参詣客が求める伝統工芸品の販売、それらを作る人々の生業に結びつき、様々な道をたどって京都のまち全体に還元されている。

信仰の場である寺院やそれを取り巻く地域、そしてこれらに関連する伝統産業が、京都の歴史の中で重要な地位をしめ、現在も文化の担い手の一つとして京都が代表的な宗教都市としての位置づけを持つ都市であることを日々感じることができる。

(4) おわりに

京都には、より身近で日常的な信仰を集める寺社や地蔵の祠が集積しており、地域住民を中心に念仏をもとにした民俗芸能や巡礼が継承されている。

また、本山や本社という宗派や祭神の根源となる寺社や、名所としてよく知られる信仰の聖地があり、市内に留まらず、市外からも多くの人々が参詣に訪れる。

京都は、これらの寺社や地蔵に対する信仰活動と、そこから生まれた民俗行事や門前町におけるもてなしなどの営みが、悠久の歴史と文化を伝える寺社等や町家等の歴史的な建造物などからなる家並みと一体となって祈りと信仰のまち京都の歴史的風致を形成している。

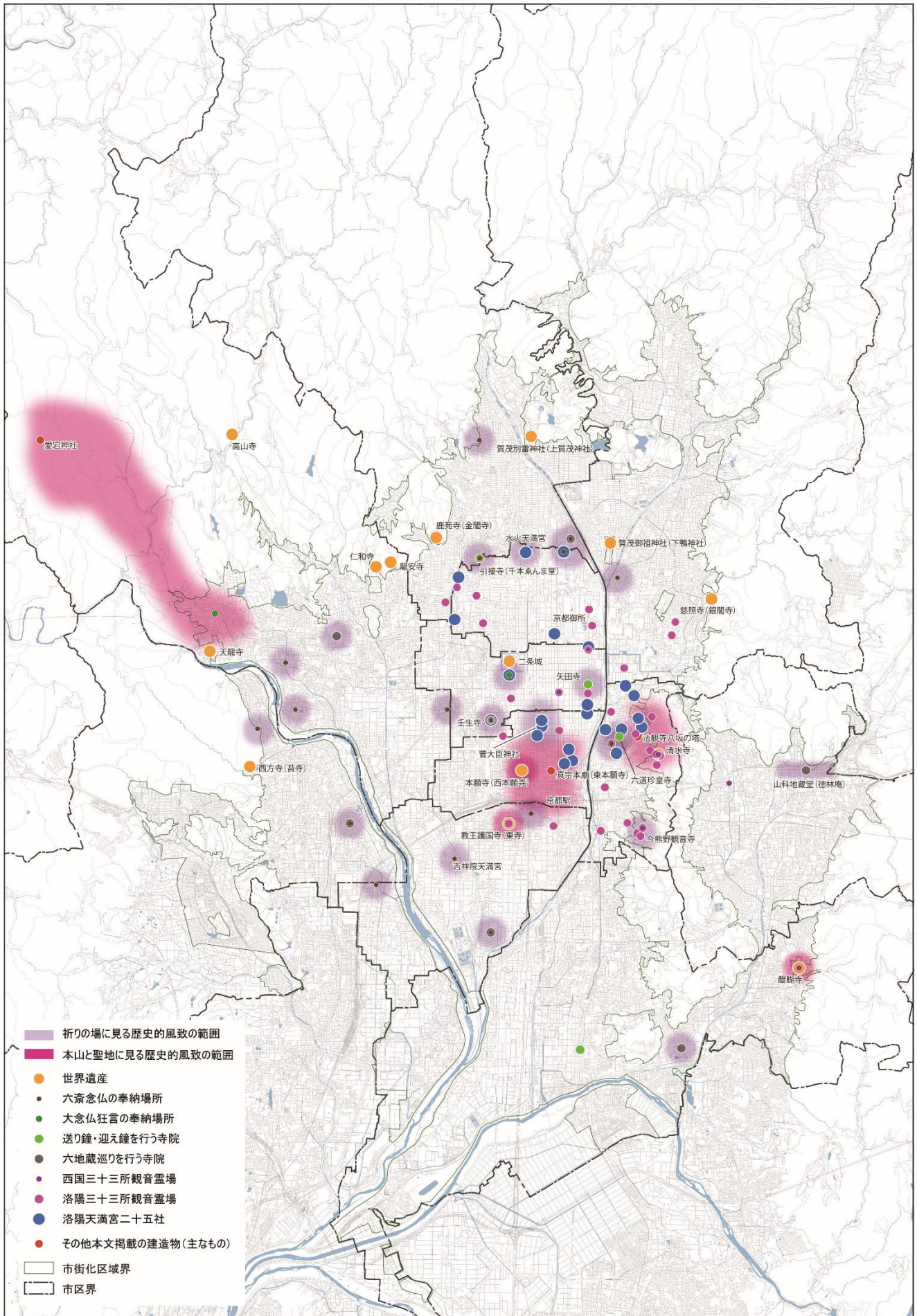


図2-1-9 祈りと信仰のまち京都の歴史的風致（総括図）